形態音韻論的観点からみた—アウ型動詞

江口泰生

（一九九〇年一〇月八日受理日）

一　問題点

現代語において、「買う」「歌う」「這う」「舞う」など語幹末にア母音を有するワ行五段動詞（以下、「—アウ型動詞」と称したい）の終止形・連体形は、［カウ］［ウタウ］などと発音され（以下、片仮名を［　］で包んだ場合、音形式を表す事とする）、［コー］［ウトー］などのようなオ段長音に発音される事はない。このような［ーアウ］の形式は、他の品詞においては、例えば「ガウスの定理」とかいうような、特別の事情のある語彙に限ってみられるものである。更に、［ーアウ］の形式は—アウ型動詞にみられるといっても、西日本においては—アウ型動詞の連用形は［コーテ］［ウトーテ］（「買うて」「歌うて」）であり、東日本においては一般に［カッテ］［ウタッテ］（「買って」「歌って」）なのであって、—アウ型動詞の終止形・連体形にのみみられる形式なのである。

このような状態は、本居宣長（享保三年1730～享和三年1801）が『漢字三音考』を著した時期（天明四年1784序）には、当時の中央語である京都方言において既に成立していたようで、本居宣長は次のような記述を残している。[*1]

今俗ノ平話ニハ。却テ此再ビノ音便ハ無クシテ。合ヲバア。ウ。負ヲバオ。ウ。歌ヲバウタ。ウ。舞ヲバマ。ウトヤウニ呼テ。ウヲヲト呼ブコトハナシ。［故ニ合ヲモ負ト混ジテ。共ニオヲト呼テ。上ノ音マデ轉ズル事モナク。上ヲモ本音ノマヽニサダカニ呼ベリ

[—au] formed verb from Morphonological point of view

Yasuo EGUCHI

「合う」「負う」「歌う」「舞う」を［オー］［オー］［ウトー］［モー］などという事はない、と記述している。この記述の場合、当時の言語を観察したうえでの発言であると認めて良いと思われる。また、「歌う」のような非一音節語幹の動詞の場合についても言及しているので、この時期の京都方言においては、現代語の—アウ型動詞の状況と一致する状況であったものとみてよいようである。

ところが、著者は不明であるが『一歩』[*2]（延宝四年1676刊）には、

一同仮名違ふの字の所に
　うつろふ移　へつろふ諂
　是は似たる事なれ共うつろふはろの仮名也　へつろふは仮名違也))

へつらひへつらふへつらへとかよふ故らの仮名也

という記事がある。この記事は「うつろふ」と「へつろふ」は似ているが、「へつろふ」のほうは活用させた時に語幹末音節が「ら」であるので、本来「へつらふ」であるべきである事を説いたものと思われる。つまり、この時期においては、活用させてみなければ—アウ型動詞であるか、本来［—オウ］の形式を有する「思う」「整う」「添う」などの動詞（以下、これらを「—オウ型動詞」と称したい）であるかが判明しなかった事を物語っているものと思われる。従って、—アウ型動詞は—オウ型動詞と合流し、［—オウ］（［—オー］）と発音されていた事を反映する記事であると考えられる。但し、『一歩』の成立時期・成立事情や著

書などが不明であるため、この記述がどの時期の言葉の反映であるのか、断定ができないのが残念である。少なくとも『一歩』が刊行された延宝四年以前の状態を反映しているとしかいえない。

『一歩』に記述されたような状態、即ち—アウ型動詞と—オウ型動詞が共に［—オウ］（［—オー］）と発音されていた状態は、契沖（寛永一七年1640～元禄一四年1701）の『和字正濫抄』[*3]（元禄六年1693）の記述にも見られる。

何ろふといふ言の類

炎　万葉　かけろふ　蜻蛉かけろふ　梟ふくろふ　和名

右は衰おとろふ　拾ひろふ　なといふに。拂はらふ　捕とらふなといふ。まがひをわきまへむためなり。おとろへ、ひろひ、はらひ、とらへ」などうごかす時。おとらへ、はろひ等といはれぬにてわきまへ知らるゝなり。今出せるは躰にて動かねは。かねて覺え置へし、凡ふもし下にある時。上の音便まがふ事おほし。いふとゆふ。はふとほふ。とふとたふ。かふとこふ。よふとやふ。そふとさふ。なふとのふ。おふとあふ。まふともふ。これらなり。皆うごかして知るへし

「ふ」文字が下にくる時、上の音と融合して紛れる事が多い。［—アウ］と［—オウ］の区別について、名詞の場合は活用しないので予め覚えておく必要がある、動詞の場合は活用させて判断するとよいとする旨が述べてあり、—アウ型動詞と—オウ型動詞の発音の区別が活用によらねばならなかった事情を反映した記事であると思われる。

それでは、『和字正濫抄』・『一歩』の記事に反映するような、—アウ型動詞と—オウ型動詞との発音の区別の消失は何時からなのであろうか。

既に諸家が説くように、開音と合音の長音化は中世初期に著しくなっていたようである。[*4] また、開合の混乱例も既に鎌倉時代から散見される。[*5] しかし、検討の余地があるのだが、これらの例は理解語彙である字音語や個別の事情が推察される語彙（「かうむる」[*6]・「おほす」[*7]・「たまふ」[*8]）や長音化に伴う一音節語幹動詞の語幹保持機能が働いたと考えられる語彙（「悶イキトウ」）など、[*9] 特に語形が不安定な環境にある語彙に目立つように思える。とすれば、語彙的な現象であったのではなかろうか。従って、この時期においては、—アウ型動詞と—オウ型動詞との発音の区別そのものは存したものと思われる。

キリシタン資料においても概ね両動詞の語形の書き分けがみられるが、『ロドリゲス日本大文典』にもみられるように、規範的な立場以外の場では混乱が相当に進んでいたらしい。[*10] そして『一歩』・『和字正濫抄』の記事に反映した状態にいたるのである。

つまり、中世初期から—アウ型動詞と—オウ型動詞の、語幹から活用語尾にかけては既に長音であった。しかし両者は混乱する事はなかった。その後、少なくとも近世初期（『一歩』・『和字正濫抄』）には、—アウ型動詞は—オウ型動詞のように発音されるようになるのだが、それから百年経る事もなく、—アウ型動詞は今度はもとの長音ではなく、［—アウ］という形式で出現する（『漢字三音考』）のである（以下、—アウ型動詞が再び［—アウ］の形式に戻る事を—アウ型動詞の回帰と称したい）。

このように—アウ型動詞の語形の変遷を追ってみると、①或る理由があって—アウ型動詞と—オウ型動詞とが合流したにも関わらず、短期間のうちに—アウ型動詞の回帰を生じたのは、どのような理由があっての事か、②このような現象が生じるためには、—アウ型動詞と—オウ型動詞とが合流する原因と、—アウ型動詞の回帰の現象の原因とが別個の理由によるものと考えなければならない、③そして—アウ型動詞と—オウ型動詞とが合流する事によって、新たに—アウ型動詞の回帰の原因が生

じなければならないような関係に両者がなければならない、④現代の西日本の方言においては、―アウ型動詞の連用形は―オウ型動詞の連用形と同じように［コーテ］［ウトーテ］（「買うて」「歌うて」）のような形式を有しているが、何故―アウ型動詞の終止形・連体形においてのみ［―アウ］の形式を有するのか、といった問題が存在しているように思われるのである。

二　従来の説

―アウ型動詞の回帰現象について、従来次のように説かれてきた。

濱田敦氏は、「この動詞（―アウ型動詞……江口注）の終止連体形をauに逆行せしめ、同時に「添ふ」「思ふ」などの語尾をもやはりouの形にもどした力は、従って他（東西両方言の交渉・仮名遣の干渉……江口注）に求めなければなるまいと思う。それは他でもない。多くの他の動詞にあっては、終止連体形の語尾が音韻uの形で終っているという形態論的事実である」と[*11]言われる。

濱田氏のお考えは、長音を国語史の上でどのように位置付けるかという問題とも絡んでおり、ここで一部分のみを引用して批判を加えるという訳にはいかない。但、「添ふ」「思ふ」などの動詞の終止連体形の語尾が音韻uで終わっているという記述の部分については、少し問題があるように思われる。特に「思う」「匂う」「憩う」「整う」など非一音節語幹の動詞の終止形は、実際には［オモー］［ニオー］［トトノー］のように長音で発音される事が多いのではなかろうか。[*12]もしこの点が認められるならば、―アウ型動詞においては全てが［―アウ］で実現するのに対し、―オウ型動詞においては語幹の音節数によっては長音になるものが出現するという事になる。この事実は、多くの動詞の終止形・連体形がuで終わるという事実の影響によって、―アウ型動詞が［―オー］から［―アウ］へ回帰したとする濱田説への疑問となりはしないだろうか。

かりにここは譲って、「思う」「匂う」「憩う」「整う」などが［―オウ］で発音されるとしても、それならば「違う」「従う」などの―アウ型動詞は、―オウ型動詞と合流した後、［チゴウ］［シタゴウ］という―オウ型動詞としての語形で、活用語尾をウで終止する在り方もあった筈である。事実、例えば鹿児島方言では、「歌う」という動詞を「ウトワン／ウトッセェ／ウトモス／ウトタ／ウト／ウトトキ／ウトエバ／ウトエ／ウトオ」というように活用させるのである。[*13]多くの動詞の語尾がuで終止し、この類推を受けて―アウ型動詞の回帰が生じたとするならば、何故、―オウ型動詞へ合流した―アウ型動詞は［チゴウ］［シタゴウ］という語形に変化する事によって、動詞の語尾をウで終止しなかったのか、という疑問がやはりあるように思われるのである。

飛田良文氏は濱田氏の説を肯定した上で、更に「「オー」が消滅しなければならなかった必然的原因は、開合の消失による同音語の存在であった」と[*14]という理由を提出される。しかし、同音衝突を避けるために［―オウ］から［―アウ］へ回帰したとするならば、―アウ型動詞の回帰現象が、何故動詞だけに生じた現象であるのかが説明出来ないのではなかろうか。開合の区別の消失によって、意味の上で最も痛手を蒙るのは、「僧ソウ―草サウ」などのような字音語であったと思われるからである。同音衝突を避けるために―アウ型動詞が回帰したというのであるならば、字音語においてこそ最もこの回帰が生じなければならないと思われるからである。[*15]

以上の説が、―アウ型動詞が一旦とった［―オー］という音連続が、各々の体系の中で特殊な位置を占める点に注目したのに対し、これとは全く異なる観点から注目すべき解釈を提示したのが小松英雄氏である。

氏は、「「かなふ」という動詞の終止形・連体形の発音は、平安時代以降、今日までにつぎのように変化した。

叶ふ　kanaΦu＞kanau＞kanao＞kano:＞kano:

……右に見たように語幹が破壊され、変則二段活用ができあがってしまう。……これでは運用上、不都合なので、行き過ぎた音韻変化の後始末としての、語幹の再整備が必要になってくる。これらの動詞にあっては、終止形・連体形を、いっせいに変化以前の語形にもどすことによって、この課題を解決した。これが現代語の「かなう」なのである」とされた。[*16]

柳田征司氏はこれを受けて、「活用語の語幹末に生じた母音連続」[*17]・『室町時代の国語』[*18]などで、この問題を取り上げ、「それ（―アウ型動詞の回帰……江口注）を可能にしたのは、この動詞以外の動詞の終止・連体形がすべてuで終るということであったと考えられる。……或る事情により語幹保持が出来なくなってくると、語幹保持の力と他の動詞との不均整（他の動詞の終止・連体形がすべてuで終るということ……江口注）を統合しようとする力とが重なって、それが相乗作用を起したものと考えられる。その或る事情とは、オ段長音の開合の混同である」[*19]とされる。一見、浜田説と小松説の折衷案のようにみえる。

しかし、実際に論文にあたってみると分かるように、小松氏と柳田氏の考え方には相当な開きがあるように思われる。後述するように小松氏は、「二段活用の一段化」という背景を匂わせて「変則二段活用ができあがってしまう」・「語幹の再整備が必要」などといわれていると思われるのに対し、柳田氏は、「語幹保持の力」は「二段活用の一段化」とは別個のものである、とされるからである。この違いは一体どうして生じたのであろうか。そしてこの問題をどのように解釈すれば良いのであろうか。これは、―アウ型動詞の回帰を国語史の上でどのように位置付けるか、という問題とも絡んでこよう。

―アウ型動詞の語形の史的変遷を辿り、これに関する従来の解釈を検討する事で、問題は、①―オウ型動詞ではなく、―アウ型動詞だけが、②しかも、名詞などではなく動詞だけが、③そして、終止形・連体形だけが、何故［―アウ］形式を持っているのだろうか、④このような回帰現象（一旦は［オー］となり、短期間の間に再び［―アウ］に回帰する変化）が何故、短期間の間に生じたのか、⑤或る理由があって［―オー］となり、それとは別の理由があって［―アウ］に回帰した、この二つの理由とは何か、⑥そして両者は、前者のために［―オー］となり、［―オー］となった結果が―アウ型動詞の回帰の原因を生じたというような関係にあらねばならない、このような関係とは何なのだろうか、⑦―アウ型動詞の回帰における語幹と活用語尾とはどのような関係にあるのであろうか、⑧そして―アウ型動詞の回帰現象とはどういう意味を有するのか、というような問題が存在するように思われる。

もとより先学の説を越えるようなものではないが、以下、これらの点について卑見を示してみたく思う。

三　現代方言における―アウ型動詞の諸相

―アウ型動詞が―オウ型動詞と一旦は合流しながら、時をさほど経ずして再び［―アウ］の形式を有する事となった事実そのものは、一節で記したとおりである。しかし、―アウ型動詞が―オウ型動詞と同じように発音されていたとしても、文字にする場合、その過程がそのまま表記される事はない。識字層においては、一節でみた『一歩』・『和字正濫抄』のように、活用させてみて活用語尾を送るという事が行われただろうからである。従って、―アウ型動詞の回帰がどのような理由で生じたものかを、当時の文献で確かめる事は易しくはない。

そこで、現代方言で—アウ型動詞がどのように実現しているか、という点に注目してみたい。従来、方言を利用して過去の中央語の実態を究明しようとする場合、①かつて全域で行われていたが、その後、中央語では失われてしまい、結果として方言において古態を残す場合（「オ列長音の開合」など）[*20]、②過去の中央語の伝播によるもので、過去の中央語の反映である場合（方言周圏論や方言国語史的研究）[*21]、③過去の中央語に生じた現象と同じような現象が、現代の方言において生じている場合（能登半島におけるアクセント変化）[*23]、などのような場合にもとづいて行われる事が多かった。

しかし、ここでは次のような点に着目してみた。或る原因のために中央語において生じた変化というのは、中央語においての変化であって、原因が同じであっても地方においても常に同じ結果が生じるとは限らない。それは地方の方言体系に委ねられている場合があるからである。過去に生じた力に対して、それぞれの方言によって異なった結果が生じているならば、その異なった結果を統合・検討する事によって、逆に中央語で生じた現象を推察しようとするのである。例えば、かつて迫野虔徳氏が九州におけるオ段拗長音の在り方を検討する事で、中央語におけるオ段長音の合流過程を明らかにしたような方法[*24]である。勿論、このような方法は常に有効であるというのではけっしてない。しかし、以下に示すように、[*25]—アウ型動詞の回帰の現象の背後に働いた力の解明には、この方法が有効であるように思われる。

—アウ型動詞を含めてワ行四段動詞は、東北地方の一部の地域においては、ラ行四段動詞として活用する。ワ行四段動詞が何故ラ行四段動詞として活用するのか、その理由については明示してあるものを見付ける事が出来なかった。動詞としての数の多いラ行四段動詞に牽引された事は間違いのないところであろう。更に—アウ型動詞や—オウ型動詞には、語幹から活用語尾にかけて長音が生じやすいので、これを避けたものかもしれない。もしこういう事がありえたとすると、語幹から活用語尾にかけての長音を避けるために活用語尾に変化が生じた、という事になろうか。

栃木においては、[仮定カエバ／終止カー／禁止カーナ／否定カーネ／意志カーベ／命令カエ／疑問カーカ／中止カエ／過去カッタ]（「買う」）のように活用するという。語幹に活用語尾が融合しており、否定形［カーネ］・意志形［カー］においては、長音部分が活用語尾に相当している。また、同様の理由で終止形［カー］・禁止形［カーナ］・疑問形［カーカ］の活用語尾がはっきりしない。

活用語尾が省略されて、一見、活用語尾が合理化されたようにみえるが、これを簡単に合理化としてしまう事には慎重でなければならないと思う。その地域の方言の活用体系の中で、この活用語尾がどのような位置を占めているか、という点が重要だからである。場合によっては、活用語尾が省略された場合、意味の伝達に支障を生じる場合もあるのではなかろうか。それでは、何故、この方言では、活用語尾が省略されているのに、意味の伝達には支障が生じないのであろうか。ここは、語幹が一定の形式［カ］を有している事に注目する必要があるように思われる。活用語尾の不鮮明さを補う役割をしているのではなかろうか。

群馬県では、一音節語幹動詞における—アウ型動詞は［カウ］・［ハウ］（「買う」「這う」）のように発音されるが、非一音節語幹の動詞は［ワロー］・［カノー］（「笑う」「適う」）のようにオ段長音で発音するという。動詞の語幹の音節数によって、異なる語形を有するという事になる。

一音節語幹の動詞の場合、［否定カーネ／過去カッタ／終止カウ／禁止カウナ／意志コーベ／仮定カエバ／命令カエ］（「買う」）のように活用する。意志形がオ段長音となっており、否定形の活用語尾が語幹に融

合してしまっているが、それ以外は語幹と活用語尾が明確である。

非一音節語幹の動詞においては、[否定ワラーネ／過去ワラッタ／終止形ワロー／禁止ワローナ／意志ワローベ／仮定ワラエバ／命令ワラエ]（「笑う」）と活用し、終止形・禁止形・意志形がオ段長音となっていて、語幹に二つの形式が生じるという状況が生じている。しかし、これらの状況は既述のように、非一音節語幹動詞においてのみ生じている。語幹が一音節語幹動詞より長く、従って意味の伝達に不都合がないので生じた代償作用ともいえる。

伊豆大島においては、[終止・連体カー／命令カエ／連用カイ／過去カッタ／意志カーベ／仮定カヤー／打ち消しカワナイ]のように活用する、という。終止形・連体形においては、語幹と活用語尾が融合している。しかし、語幹が一定の形式（[カ]）を保っている。

新潟県においては、[否定カワン／丁寧カエマス／過去カータ（カッタ）／終止カウ／禁止カウナ／命令カエ／意志カヨー]という系列と、[否定コワン／丁寧コエマス／過去コタ／終止コ／禁止コナ／命令コエ／意志コ]（ただし、オ段母音は[o]）という系列があるという。後者は過去形・終止形・禁止形・意志形において、語幹と活用語尾が融合していて、活用語尾が不鮮明である。しかし、語幹が一定の形式を有している。

石川県においては、「語幹の末尾母音が－a・－o のものはオ段音化してコータ（買った）、モロタ（貰った）、オモタ（思った）となる。これが行き過ぎて……モロワン（貰わない）、モロタイ、モロマシタ、モロエヤなどの変わった言い方を生み出している」[*26]という状況である。これは、先の新潟県の後の系列と同じ状況といっても良いであろうか。

―アウ型動詞は西日本の多くの地点において、終止形・連体形は[カウ][ウタウ]、連用形は[コータ][ウトータ]（「買った」「歌った」）のような音便形をとる。

大阪では、一音節語幹の動詞の音便形の場合、[コータ][オータ]（「買うた」「会うた」）のように本来の語形をとるが、非一音節語幹の動詞の音便形の場合、[ヒロタ][ウトタ]（「拾うた」「歌うた」）のように短呼されるという。このような事情は兵庫においても同様で、但馬以外では一音節語幹の動詞は[カーテ][アーテ]（「買うて」「会うて」）のような音便形をとるが、非一音節語幹の動詞は[アロタ][ソロタ]（「洗う」「揃う」）のようになるという。語幹の音節数によって、連用形の形式に違いがあるのは既述の群馬県の場合と同様である。

また、二節でも述べたが、鹿児島県では[否定ウトワン／丁寧ウトモス／過去ウトタ／終止ウト／連用ウトトキ／条件ウトエバ／命令ウトエ／意志ウトオ]のように活用する。丁寧・過去・終止・連用形では、語幹と活用語尾が融合しており、活用語尾が不鮮明である。しかし、語幹が一定の形式を有している。

現代方言において、―アウ型動詞がどのように実現しているかを略述してみた。各方言によって実現の仕方に違いがあるが、これらを通じて判明する事は、先ず語幹の音節数によって―アウ型動詞の実現の仕方に違いのある方言がある、という事実である。特に一音節語幹の動詞の場合、語幹の形式が一定に保たれ、活用語尾が語幹と融合する事が少ないように思われる。逆に非一音節語幹の動詞では、語幹及び活用語尾の形式に融合や省略がなされる場合がある。語幹の音節数の違いによって、現代諸方言を調査したならば、実現する動詞の語形に相違のある場合が、他の事象の場合にもあるのではなかろうか。一音節語幹の動詞に他の形式が下接する場合などの報告が欲しいものである。[*27]

次に―アウ型動詞の実現の仕方として、語幹と活用語尾が融合して長音で現れる事が多い、という事が挙げられる。この結果、活用語尾が不

鮮明になる事が多い。但し、活用語尾が不鮮明な場合、逆に語幹が一定の形式を有していて、両者があいまって全体として意味の伝達に差し障りがないような状況を生み出しているようなのである。例えば鹿児島方言や石川方言や新潟方言の状況がそれであろう。

このようにみてくると、実は—アウ型動詞の語幹が一定の形式に保たれるという事と、活用語尾が融合したりしなかったりするという現象とは、表裏一体の関係をなす現象なのではなかろうか、という事ができはしないだろうか。つまり、言い換えるならば、活用語尾が語幹に融合している—アウ型動詞において、一定の形式を有する語幹を確立するという事は、反面、活用語尾を整理する事に他ならない事なのではなかろうかという事である。

諸方言を通覧して判明するように、活用語尾が不鮮明である場合、語幹が一定の形式を保っている。語幹が一定であってこそ、活用語尾の融合が行われたと考えるべきであろう。いってみれば、語幹が一定の形式を有している事が活用語尾の融合の必要条件だったわけである。

二節において、小松氏と柳田氏のお考えに相違がある事を指摘した。柳田氏は「語幹保持の力」に注目される。しかし、語幹を一定の形式に保とうとする力は、語幹に融合してしまった活用語尾に影響を与える事を、無視するわけにはやはりいかないのではあるまいか。記述が簡略なのでよく分からない点があるのだが、小松氏の「変則二段活用ができあがってしまう」・「語幹の再整備が必要」という表現が、ここで指摘したような、語幹が一定の形式に保たれるという事は同時に語幹に融合した活用語尾を再整備する事という意味ならば、まさに本質を衝いたご意見なのではなかろうかと思われるのである。

以上をまとめると次のようになる。中央語において、—アウ型動詞は早くに長音の語形を有していた。これは語幹と活用語尾が融合した語形であった。但し、この場合、未だ長音が開音相当の位置にあって合音とは音韻論的弁別が保たれており、語幹は一定の語形を保っていたという事になろう。また長音が活用語尾に相当していたために、一音節語幹の動詞の場合に個別の例外現象は生じたかもしれないが、これを除けば大きな混乱はなかったのではなかろうか。

ところが、次に—オウ型動詞と合流して［オー］［コー］（「会う」「買う」）となった—アウ型動詞は、［アワヌ／オーテ／オー／オートキ／アエバ／アエ］のように語幹が［ア］段と［オ］段の二つに渉る事になる。更に、少なくとも連用形・終止形・連体形においては、語幹と活用語尾が融合した状態があるわけである。

既に述べたように、語幹が一定の形式に保たれておらず、しかも、活用語尾が語幹と融合していて不鮮明な状態は、現代方言でも避けられる傾向にある。同じような傾向がかつての京都方言にも存在したのではなかろうか。

ここにおいて、第一義的には語幹を一定の形式に保とうとする力が働いたのではなかろうか。そしてこれは同時に、語幹と融合してしまった活用語尾を再整備する力として働いたのではなかろうか。前者の力は、京都方言においては語幹を［ア］（「会う」）の形式に戻す働きを生じさせ、後者は［アウ］（「会う」）という音連続を支え、終止形・連体形［アウ］（「会う」）を確立したのではなかろうか。

ここで、連用形が［アーテ］（「会うて」）という形式にまで回帰する事にならなかったのは、やはり連用形に生じる「音便」という形態音韻論的分野に属する力と、[*28] 語幹を一定の形式に保とうとする、これも形態音韻論的な分野に属する力との間に相剋があったからではなかろうか。語幹を一定の形式に保とうとする力が、連用形において働いていないようにみえる理由は、「音便」が生じる連用形においてであったからこそ

なのではなかろうか。

しかし、これも相対的なものであった事は、ある地域では「音便」の力がまさり［オーテ］（「会うて」）となり、ある地域（例えば、本節で示した群馬・兵庫における―アウ型動詞の音便形を参照）では、［アーテ］（「会うて」）となっている事からも判明する。

「音便」という現象の史的意味そのものが、今後、更に考えなければならないものであると思われるので、うまく説明出来ないのが残念であるが、京都方言において―アウ型動詞の連用形が回帰しなかったという問題は、「音便」との関わりを無視しては論じられないように思う。

さて、以上のような事情が考えられながら、何故、―アウ型動詞は―オウ型動詞へ一旦は合流したのであろうか。これは語幹を一定の形式に保ち、同時に活用語尾を再整備する力とは別のレベルの力が働いたと考えなければならない事は冒頭でも述べた。それは、小松氏や[29]柳田氏も[30]指摘されている事だが、「開合の混乱」という全く音韻的な現象だったのであろう。開音が合音へ合流することによって、―アウ型動詞は―オウ型動詞と同じように［―オー］と発音されるようになった。前代から続いていた語幹と活用語尾の融合した状態に加えて、こうなるとこれまでア段で揃っていた語幹が他の段（この場合、オ段）へ渉るようになる。京都方言ではこれらを嫌って―アウ型動詞は再び［―アウ］へ回帰したのではなかろうか。

四　一八世紀初頭の薩隅方言からみた―アウ型動詞

所謂「外国資料」といわれるものの中で、ゴンザの諸資料[31]には大変重要な位置を与える事が出来るのではなかろうか、と本稿の筆者は考える。もっと評価されても良い文献なのではなかろうか。勿論、ゴンザの諸資料は一八世紀初頭の薩隅方言が記載されているものに過ぎず、中央語を記載したものではない。しかし、それにも関わらず本稿の筆者が評価したいのは、以下のような点があるからである。

例えばキリシタン文献のように、日本語の正書法にひかれたという事情が考えられない。極端な場合には、キリシタン資料は仮名文献と大差ないとまでいわれる場合があるのである。またキリシタン文献では規範的な性格がみられるが、そのような意図が全く考えられないのである。ゴンザという一般人の言語をそのままロシア文字によって表記したという特殊な事情[32]こそが、この文献の資料性を高めていると思われる。結果としてゴンザの諸資料の場合、一八世紀の薩隅方言を簡略音声表記したほどの、精密な言語資料として考えて良いように思われるのである。過去の言語資料において、外国資料という枠を離れても、これほど日本語を客観的に写したものは見当たらないのではなかろうか。

但、問題はゴンザの諸資料が薩隅方言を記載したものである点にある。しかし、これは利用してみて、薩隅方言の内部で完結する問題であるのか、中央語史との関連を考えるべき問題であるのかの判断を下せば良いと思われる。前節に①②③として示したように、方言が中央語史に示唆するところは少なくない。また、過去に生じた力に対して各方言が異なる結果を示す場合があり、これによって逆に中央語の変化の様相を窺う事が可能になる場合もあるように思う。

さて、ゴンザの諸資料に出現する、オ段拗長音の開合・―アウ型動詞の語形の問題については、上村孝二氏や[33]田尻英三氏が[34]既に記述されている。上村孝二氏はゴンザの諸資料における―アウ型動詞の語形から現代薩隅方言の―アウ型動詞の語形への推移の過程を考察されておられる。しかし本稿で強調しておきたいのは、両者があまり言及されなかった、オ段拗長音の開合の在り方と―アウ型動詞の語形の在り方との間に生じ

ている不均衡である。

『新スラブ・日本語辞典』[35]におけるオ段長音の開合は次のように出現する。先ず、―アウ・オウ型の名詞から挙げる。

(1) a u

イェントゥ（遠島３４４）イショ（衣装４２５／１６７／１４４）シュンショ（僣上２７３／１５７／１５７）オ（王８２／１５６／１８４／４０７／９０／１５４／６４／６４／９２／４０７／９０）オショ（和尚２３１）キョ（京３４７）キョデ（３６／３７／３１７／３７／３７／３７／３６／３６／３６／３７）コボチョ（小庖２１９）コロ（香灯１５４／１５４）サモク（草木１３４／１３４）シュショ（殺生５９／５９／５９）ジョ（錠１２４／４０２／１２５／１２４／４４４／１５４）ジョ（状１４０）ショガ（生姜１４９）ショギ（将棋４１６）ショグヮツ（正月７７／１５３／７７）ショジ（障子３０８）ショジン（精進１２０／２５７／８０／１２０／２６０／２５７／２５７／８０／２５７）ジョズ（上手１０４／１７８／１７８／２４４／２１２／２１２／２９２）ショチキナ（正直な２３９／２５７／２９２／２５７／２９２）ショヤ（庄屋３４５）ジョロ（女郎３１）スィショ（水晶１６８／１６８）スヨ（惣様３８／１５７他２８例）ゾ（象３２８／３９６／３２８）タンジョニチ（誕生日９０／２５４）チェップ（鉄砲３９／１８６／２２６／４３７他１０例）ヂョガイヤ（両替屋８９）チョチン（提燈１７８／３９４）チョ（帳１７８／３９４／２１６／２１６）ヂョフォ（両方２２２／２２２／２２２／２２２）ツクショ（畜生１１３／３２５他７例）テショ（大将５５／５２他３例）デミュ（大名３４／５４／１５９）ドゥ（牢１２９他７例）ドグ（道具１１３／１３１／２２６／３３６／３８９他３例）ニュボ（女房１１２／３３５他１６例）ニンギョ（人形１５５他４例）ファンジョ（繁盛３１２／３１２／３１２）フィャクショ（百姓１３３／１６５／１８５／１３３）ブギョ（奉行５５／５５／５５／５５）フォソ（疱瘡６２／３５５／４３９）フォチョ（包丁２１９）ボズ（坊主１１４／１４９／１５３／２５４／２７３／３２１他２例）ミョジ（苗字２８９／３９４）ミョバン（明磐７６／１５６）

(2) o u／o u o／o o

ウ…（大９５／５７／５７／５７／５７／１９８／７３／７３／７３／７３／７３／４５／４５／４５／８０／８５／３３７／２１９／３５／２９５／４１４／３９／３９／１３７／３５／３６／４２１／４１０／２３０／４４６／２３３／７８／３４）ウ…（多３４／２２２／１８１／９４／３６１／１８１／９４／１３９／１４４／２２２／２６６／２７０／３４１／２２２／２７０／１８１／１８１／２２２／１８１／１８１／２２２／１８１／１８１／５２）キニュ（昨日６９／６９）キユ（器用２０１）コズ（小僧４０７）ドゥ（胴３４５／３６９）トゥメガネ（遠眼鏡１３６）ドシ（同志１５８／３５７他５例）フク（奉公１２８／１２８／３２８／３２８／３２８／７２／７２）フユ（不用２０７他７例）フユジン（不用心２７２）ユジンスル（用心１３０／１６７／２３１／２４６／３４８／４３５／４４２他９例）

(3) e u／e p

イチヂュ（一帖９１）キュ（今日９３／３２１／９５／９３／３２１）チョブク（調伏６０他７例）

以上、名詞の語形に対し、―アウ型動詞と―オウ型動詞の語形は次のように現れる。

(1)―アウ型動詞

アラウ（洗う７１／１４３／１８６／２４４／２５２／３８２／４３５）アラウコト（洗うこと４３５）アラワント（洗わんト２１１）イェ

クラウ（酔いくらう３６／３８４）イェクラウコト（酔いくらうこと３６／２３５／３８４／４３６）イキヤウ（行きあう３４４／３４４）イキヤウフト（行きあう人３４４）イサカウ（諍う４４０）イサカウコト（諍うこと６４／３０２）イサカウト（喧嘩好きの６４／３１９）イサカウトント（諍うとんト３０２）イサカウフト（諍う人１００）イサカワント（諍わんト２７１）イタヅレツカウコト（徒らに使うこと３１０）イタヅレツカウトント（浪費的な３１０）イタヅレツカウフト（浪費者３０９）イナウオケ（担う桶３９２）イヤウ（言い合う５９／９４／２９４／３２８／３４１）イヤウコト（言い合うこと５９／９４／２９４／３２８／３４１）イヤウト（言い合うト３４１）イヤウトン（言い合うとの５９）イヤウトント（言い合うところの２９４）イヤワン（言い争わない２０６）イヤワンコト（言い争わないこと２０６）イヤワント（言い争わないところの２０６）イヨタカキツケ（言い合うた書きつけ９４）ウタウ（歌う５９／６８／２６０／２６７／２８３）ウタウコト（歌うこと２９７／２９８）ウタウタウコト（歌（を）歌うこと２９８）ウタウフト（歌う人２９７）ウトタト（歌うたト６７）カウ（買う７１／１２３／１６８／３２５／４０１／４３４／２４９）カウコト（買うこと１２３／１４２／１５０／２４９／３２５／４０１）カウフト（買う人１４２）コタト（買うたト１６８）コタトント（買うたとんト１２３）カケアウ（かけあう１２８）キアウ（気合う３３９）サキナラウ（先に習う２６８）サキナラウコト（先に習うこと２６７）サキワラウ（先に笑う２６９）シェシカウ（せしかう３５２）シェシカウコト（せしかうこと３５２）シェシカウト（せしかうこと３５２）シソコナウ（しそこなう２４１／２７４）シソコナウコト（しそこなうこと２７４）シソコナウフト（しそこなう人２７４）シソコノタコト（しそこなうたこと２４１）シソコノタト（しそこのうたト２４１）シマウ（仕舞う４７／２６１／２７４／３１６／３２４／３３２／３３３）シマウオナゴ（しまう女３８５）シマウコト（しまうこと３３３／３１６／４７／３８５）シマウシタンフト（しまう下の人２４７）シマウフト（しまう人４７／３１６／３３３／３８５）シモタト（しまうたト３１６／３３３）シメアウ（霜にあう２５１）シヤウ（為合う３８４）シリヤウ（知り合う２４８／２８９／３０２／３４３／３８６／４０３）シリヤウコト（知り合うこと３２０／３４３／３８６／４０３）シリヤウト（知り合うト３８６）ダキヤウ（抱き合う４２８／４４１）ダキヤウコト（抱き合うこと４４１）タクセナロタト（沢山習うたト１８２）チガウ（違う３０５）チゴタト（違うところの３０５）チゴタコト（違うたこと３０５）チゴタモン（違うた物２０９）チッタウタウ（ちった歌う２４５）ツカウ（使う５２／１３８／１４０／１４１／１４２／１４４／１５１／１９４／３６６／３８５）ツカウ　カネ（使う　金（を）１５１）ツカウコト（使うこと５４／１４１／１４２／１４４／１５１／３０７／３８５）ツカウト（使うト３８５）ツカウフト（使う人１４４／１９５／３８５）ツコタコト（使うたこと２９３）ツキヤウ（突き合う（角で）３３）ツキヤウト（突き合うト３３９）ナラウ（習う１４６／１８９／１９７／２５９／２８７／３９２／４２７）ナラウコト（習うこと１８９／１９７／２５９／３９１／４２７）ナラコトスィタト（習うこと好いたト１７６）ナラウト（習うト３９１／４１８）ナロタト（習うたト３９１）ヌィヤウ（縫い合う３５４）ファウ（這う２５０／２７２／２７４）ファウコト（這うこと２５０／２７４）ファヨウタウ（早う歌う２６４）ファンブンナロタト（半分習うたト２５１）ヒィラウ（拾う１８９／２４１）フトツィウタウ（一つに歌う３３３）フトツィナラウコト（一つに習うこと３４０）フミソコナウ（踏みそこなう４４０）フイェメニアウ（ふるまいにあう２３０）ミヤウ（見合う

５０／２４０／２４２／２８４／３０６／３８７／４３９）ミヤウコト（見合うこと２８４／３０６／３８７／４３９）ミヤウトント（見合うとんト３０６）ミヤウフト（見合う人２８４／３０６）ミヤウト（見合うト３２９／４３９）モラウ（貰う１８３／２９３／３８５）モラウコト（貰うこと２９３／３８５）モラウトント（貰うとんト１９３）モラウフト（貰う人２９２）モロタト（貰うたト８７）ユウタウ（良う歌う３２７）ヨカナラウコト（良か習うこと２２０）ワガツカウト（我が使う３１７）ワガツカウト（我が使ウト３１７）ワガツカウフト（我が使う人３１７）ワガナラウコト（我が習うこと３１８）ワガナラウト（我が習うト３１８）ワラウ（笑う６２／８４／１２２／２４０／４３８／３９７／２５６／２７４／２７８／２８４／３３０／３８７／４４０）ワラウコト（笑うこと８４／２４０／２５６／２７４／３３０／３９７／４３８／４４０）ワラ（ウ）フト（笑う人２５６／２７４／４４０）ワロ（笑う２５６）

(2)―オウ型動詞

ウ（追う８０）ウコト（追うこと８０）ウフト（追う人８０／１４１）ウフトント（追う人の８０）オウ（追う１４１／１９０）オウ（追う４４／２４０／２４７）オウコト（追うこと２４０／２４７）オウトル（追いかけてつかまえる２７９）オム（思う３４１／３８３／４１０／７１／７６／９１／１０２／１８１／１８３／１９０／１９２／２０７／２５２／３８４）オムコト（思うこと１８３／１９０／１９２／２０７／３８３／４１０）オムコト（思うこと１０２／３８４／２５２）オムタト（思うたト９１／３８３）オムトント（思うとんト１０２／１８１／１９０）サキオム（先に思う２６８）ノグ（拭う７３／２４７／２５８／３８９／４４１）ノグタト（拭ぐたト７３）フトゥオム（太う思う４６）フトゥオムコト（太う思うこと４６）ヤトウ（雇う１９１）ヤトウコト（雇うこと１９８）ヤトウフト（雇う人１９８）ヨク（憩う３８４／４００）ヨクコト（憩うこと４００）ヨクタト（憩うたト３８４）ヨクフト（憩う人３８４）ヨコウコト（憩うこと３８４）

以上を纏めると［表１］のようになる。

［表１］

	名詞	動詞
―オウ	―u	―u／―ou
―アウ	―o	―au

―アウ型動詞が一旦は―オウ型動詞と合流したかどうかという事は、ここでは問題にはしない。重要な事は、―アウ型動詞が―オウ型動詞と合流したにせよしなかったにせよ、開音の音韻論的位置――すなわち［―オー］の位置から離れて、［―アウ］の形式を有している事である。九州方言においては、オ段開音がオ段合音へ近付き、その結果、両者の弁別をはかるため、オ段合音はウ段長音へと変化してしまった過程が既に明らかにされている。[*36] 開音［アウ］が合音［オウ］の位置を占めるような変化が生じておりながら、この変化に同調せず、―アウ型動詞が［―アウ］という形式を有している事は、過去の薩隅方言において、―アウ型動詞の終止形・連体形の語幹を一定の形式に保とうとする力がいかに大きいものであったか、という事の証明になりはしないだろうか。「同音衝突」を避けるため、或いは動詞の活用語尾が「u で終ってい

る」ため、といった理由では、この事象を説明出来ないのではなかろうか。そして、同じように、中世末期・近世初期の京都方言においても、語幹を一定の形式に保とうとする力が終止形・連体形に働いたのではなかろうか。

次にゴンザの諸資料における―アウ型動詞の活用の仕方を［表2］として挙げてみる。本来ならば、全ての動詞の活用形を挙げるべきであろうが、様々な問題を提起すると思われるので、ここでは触れない。[*37]

［表2］

意味＼下接語	～ン	～動詞	～タ	～φ	～コト（フト）
遭う	*	*	オタト	*	イヤウコト
言い合う	イヤワン	*	イヨタ	イヤウ	ウタウコト
歌う	*	ウテファジム	ウトタト	ウタウ	カウフト
買う	*	ケルナヲス	コタト	カウ	シソコナウフト
為損なう	*	*	シソコノタト	シソコナウ	シマウコト
仕舞う	*	*	シモタト	シマウ	ナラウコト
習う	ナラワン	ナレナヲス	ナロタト	ナラウ	*
違う	*	*	チゴタト	チガウ	モラウフト
貰う	モラワン	*	モロタト	モラウ	ツカウフト
使う	ツカワン	*	ツコタコト	ツカウ	*
為合う	*	*	シヤタト	シヤウ	

ゴンザの諸資料においては、―アウ型動詞の語幹はア段・エ段・オ段に及んでいる。一方、活用語尾は連用形を除いて融合を生じない。ところが―アウ型動詞の終止形・連体形が［―オー］になると、語幹がオ段に渉ると共に活用語尾が融合してしまい、活用体系があまりに従来とかけ離れたものとなってしまう。このような状況を避けるために、―アウ型動詞は［―アウ］の形式を保ったのではなかろうか。

又、ゴンザの諸資料の反映する言語の方処性が不明であるため、現代薩隅方言との安易な比較は慎むべきである。しかし、少くとも現代の薩隅方言の動詞の活用の仕方は、ゴンザの諸資料に反映したような動詞の活用の在り方から漸次変化してきたものと考えて良いように思われるので、これを前節で示した現代鹿児島方言の動詞の活用と比較してみたい。

両者を比較すると、現代薩隅方言のほうが、連用形を含めて全ての活用形において、語幹は一定の形式に保たれている。しかし、同時に活用語尾が省略される。これは語幹を一定の形式に保とうとする方向での変化の行きついた姿なのではなかろうか。三節で記述した新潟や石川における―アウ型動詞の状況も、これに類するものと思われる。

五　―アウ型動詞の語形の変遷の国語史的意味

以上、―アウ型動詞の語形の変遷について述べてきた。前代からの活用語尾が語幹に融合した状態に加え、更に「開合の混乱」によって終止形・連体形・連用形の語幹が他の段――この場合、オ段へ渉る事になる。これを嫌った結果、時を経ずして再び［―アウ］へ回帰する事によって、語幹を回復し活用語尾を整備する事になったのではなかろうか。

「歌う」という―アウ型動詞が、［ウタワン／ウトーテ／ウトー／ウトートキ／ウタエバ／ウタエ］のように活用する時、語幹は［ウタ］と［ウト］の二つの形式を有する事となる。また、活用語尾が語幹と融合して長音となる場合が生じる事になる。このような状態を避けて、一定の語幹［ウタ］に回帰し、終止形・連体形の活用語尾に［ウ］をおくるという現象が―アウ型動詞の回帰現象であったのならば、［オキヌ／オキテ／オク／オクル／オクレバ／オキヨ］（「起きる」）のような二段活

用動詞が、終止形・連体形・已然形の活用語尾を語幹から切り離す事によって、語幹を［オキ］の形式に一本化し、終止形・連体形の活用語尾に［ル］をおくり、已然形の活用語尾に［レ］をおくる現象――所謂「二段活用の一段化」と平行したような関係にあるとはいえはしないだろうか。

通説によれば、二段活用の一段化は中世末期～近世初期になって一般化したらしく、時期的にも―アウ型動詞が［―アウ］へ回帰した時期はそれに含まれる関係にあるのである。但し、二段活用の一段化は品詞・語幹の音節数・活用の種類などの条件により遅速があったらしい。[*38] が、―アウ型動詞の回帰については、表記面に現れにくい事柄であるので、その過程ははっきりしない。但し、三節で示したように、現代諸方言において一音節語幹の―アウ型動詞にかぎって本来の語形があらわれる場合があるようなので、かつても一音節語幹動詞のほうが早く回帰したなどという事があったかもしれない。

―アウ型動詞に限らず、一音節語幹動詞に他の形式が下接する場合、非一音節語幹動詞と違う形式になるという現象は、現代語においてもその事例を挙げる事が出来る。二節で挙げたように、「添う」「乞う」「問う」など非一音節語幹の動詞はともかく、少なくとも「思う」「憩う」「整う」など非一音節語幹の動詞は、現実には［オモー］［ニオー］［トトノー］のように長音で発音される事が多いという現象も、一音節語幹の動詞は語幹が長音になる事を嫌った結果なのではなかろうか。

また、鹿児島方言などでは、一音節語幹の動詞に「――やる」の命令形をつけた場合に限って、「ネーヤッ／ネヤッ（寝やい）」（キーヤッ／キヤッ（着やい）」「ミーヤッ／ミヤッ（見やい）」「ニーヤッ／ニヤッ（煮やい）」のように語幹を長音化する場合と語幹にそのまま接続する場合とで揺れているという。[*39]

近畿方言では、一音節語幹の―アウ型動詞の連用形は［コータ（買った）］［オータ（会った）］のように本来の形式をとるが、非一音節語幹の動詞の場合は［ヒロタ（拾うた）］［ウトタ（歌うた）］のように短呼される事は既に三節で述べた。

従って、動詞の語幹が一音節かどうかによって、語幹・活用語尾の形式に差異が生じるのは、語幹から活用語尾にかけて拗音や長音が生じて以来、絶え間なく続いてきた現象なのではなかろうか。近世以前に生じたと思われるア・ハ・ワ行下二段活用動詞のヤ行下二段活用化現象も、このような観点から論ずべき問題であろうと思われる。[*40]

一方、これに対して、―アウ型動詞の回帰現象は「二段活用の一段化」と同じレベルの文法的側面をも有した現象だったのではなかろうか。少なくとも、活用語尾を整理する面があったと思われるからである。この意味で小松氏が、―アウ型動詞が一旦［―オウ］の形式を有する事を、「変則二段活用ができあがってしまう」と指摘されたのは、大変重要な意味を持った発言であると考えられる。[*41] ―アウ型動詞の語幹と活用語尾は、中世初期から既に長音でありながら、この事自体、―アウ型動詞の回帰現象を誘発しなかった。開合の合流の結果、―アウ型動詞の語幹がオ段へ渉り、二つの語幹と語幹に融合した活用語尾を有する「変則二段活用」が成立した事こそが、―アウ型動詞の回帰現象を誘発したと考えるのである。

二節で述べたように、柳田氏は「語幹保持の力」という概念を導入し、国語史上の様々な現象を総括して解釈されようとした。しかし、根本的な点で大きな隔たりを感じるのは、―アウ型動詞の回帰の現象において、「語幹保持の力」が活用語尾の再整備と表裏一体の関係にある事を看過される点であり、かつ「二段活用の一段化」とは別の次元の現象とお考えである点である。[*42] 語幹と融合した活用語尾を有する―アウ型動詞に

おいて、語幹を一定の形式に保つ働きというのは、一方で活用語尾を語幹から切り離す働きをするものと考えなければならないのではなかろうか。両者を均等に説明しえてこそ十全な解釈といえるように思われる。

注

＊1　本文は『本居宣長全集　第五巻』　四二五頁（平成二年一月　第四刷筑摩書店）による。この記述の事は既に濱田敦氏が御指摘なさっておられる。

＊2　本文は『国語学大系』第六巻「仮名遣　一」一二三頁（昭和五六年三月　第三刷　国書刊行会）による。

＊3　本文は『契沖全集　第十巻』二七四頁（昭和四八年十月　岩波書店）による。

＊4　例えば、奥村三雄氏『講座国語史　2　音韻史・文字史』八六頁（昭和五五年一二月第五版　大修館書店）など。

＊5　確実で古い用例を収集した論文に、辛島美絵氏「国語資料としての仮名文書――鎌倉時代のオ段長音の開合と四つ仮名の混乱表記を通して――」（昭和六一年九月　『国語学』一四六）がある。

＊6　開合の混乱の早い例として、「かうむる」に関係した語が例とされる事がある。この語は「かがふる」から生じ、「かがふる」から「かうむる」「かむる」という二つの意味の異なる語形が派生している。更に「かうむる」から「かうぶる」が、「かむる」から「かぶる」がそれぞれ派生している。このように語形と意味が大きく変遷した語彙であるが、更に語幹の部分が不安定な語であった可能性がある。

＊7　「おほす（仰す）」という語も語幹の部分が長音となる可能性のある語である。「かうむる」の場合に加えて、次の注9でも述べるように、語幹が長音になる動詞に開合の混乱例が多くみられる事にはなにか理由があるのではなかろうか。

＊8　「たまふ」の語形に開合の混乱が早く出現しやすい理由については、『日本語の歴史　5　近代語の流れ』八七頁（昭和三九年一一月　平凡社）にひとつの案が示されている。

＊9　「絶ゆ」というヤ行下二段動詞は一音節語幹を有するため、早くからハ行下二段動詞化したものと思われる。この結果、［タウ］（［タフ］）という語形が成立した。［イキトウ］という語形は、この［タウ］が合音化して［トウ］となったものと考え、開合の混乱例とするのであろう。

＊10　『ロドリゲス日本大文典』（昭和五八年七月第七刷　土井忠生訳　三省堂）では畿内を除く日本の大部分では「アクセントや発音がよろしくなく」（六〇七頁）、「この二つ（開合……江口注）を誤ることがある」（六二九頁）と述べる。

＊11　濱田敦氏『續朝鮮資料による日本語研究』（昭和五八年八月　臨川書店）所収「国語音韻体系における長音の位置――特にオ段長音の問題――」九九頁。

＊12　濱田氏は「長音」（『国語史の諸問題』九六頁　昭和六一年五月　和泉書院）において、「偶々語幹が同じ母音ウで終る場合には、音声上は長音と同じ形で実現されるにしても」として、少なくとも語幹がウ段音の場合には長音で実現される事を認めておられる。

＊13　『講座方言学9　九州地方の方言』三一〇頁（昭和五八年三月　国書刊行会）。

＊14　「東京語の連母音「ア・ウ」の成立――「和英語林集成」を中心として――」（『国語学研究』1　東北大学文学部「国語学研究」刊行会　昭和三六年六月）。更に、同氏「東京語の連母音「オ・ウ」の成立――和英語林集成を中心として――」（『国語と国文学』昭和四十二年四月特輯号）参照。

＊15　更に先ず、資料として『和英語林集成』を用いた事が問題とされなければならない。既述したように京都方言においては、『漢字三音考』が著され

た時期に―アウ型動詞は、[―オウ]から[―アウ]への回帰が完了しており、これより更に時代の下る『和英語林集成』を敢えて資料として、何故この問題が論じられなければならないのか、その理由が判然としないからである。論文の表題からも察せられるように、氏は東京語において[アウ]がいつ生じたかを中心にして論じておられるのであるが、それならば『和英語林集成』の表記が当時の東京語の発音をそのまま記録したものかどうかが問題となろう。

＊16　小松英雄氏『日本語の世界　7　日本語の歴史』三〇〇頁（昭和五六年一月　中央公論社）。

＊17　「活用語の語幹末に生じた母音連続（上）（中）（下）」『国語国文』第五十三巻　第二号――五九四号――・第五十三巻　第三号――五九五巻――・第五十三巻　第四号――五九六号――。

＊18　『室町時代の国語』五九頁（昭和六〇年九月　東京堂出版）。

＊19　注17引用論文（中）。

＊20　例えば加藤正信・大山貞子氏「新潟県方言における「オ列長音の開合」」（『文化』二一巻四号　昭和三二年）のような場合。

＊21　例えば、柳田国男氏『蝸牛考』。

＊22　奥村三雄氏「サ行イ音便の消長」（『国語国文』第三十七巻一号）・「所謂二段活用の一段化について――方言的事実から史的考察へ――」（昭和四三年一月　『近代語研究　第二集』　武蔵野書院）にみられるような場合。

＊23　金田一春彦氏「東西両アクセントの違いができるまで」（『日本の方言アクセントの変遷とその実相』昭和五〇年九月　教育出版株式会社）のような場合。

＊24　「オ・ウ段拗長音表記の動揺」（『国語国文』第四四巻第三号――四八七号――）のような場合。

＊25　以下、各地の方言の記述は『講座方言学』（国書刊行会）の記述に従うが、表記を改めたところがある。

＊26　『講座方言学6　中部地方の方言』三五二頁（国書刊行会　昭和五八年一月）

＊27　動詞の場合ではないが、一音節の名詞に助詞「ノ」が下接する場合については、江口泰生「形態音韻論的観点からみた一八世紀初頭の薩隅方言――助詞「ノ」の撥音化について――」（平成元年三月『文献探究』第二十三号）を参照されたい。

＊28　小松英雄氏「音便機能考」（『国語学』一〇一輯）。

＊29　注16に示した小松英雄氏『日本語の世界　7　日本語の歴史』三〇〇頁。

＊30　注17に示した柳田征司氏「活用語の語幹末に生じた母音連続（上）（中）（下）」・『室町時代の国語』五九頁。

＊31　村山七郎氏『漂流民の言語』（昭和四〇年四月　吉川弘文館）によれば次の資料があるという。「（1）露日語彙集　１７３６　（2）日本語会話入門　１７３６　（3）簡略日本文法　１７３８　（4）新スラブ日本語辞典　１７３６～１７３８　（5）友好会話手本集　１７３９　（6）Orbis pictus　１７３９」。これらのうち、（1）・（2）は注31引用書に、（3）は『文学研究』六六輯（昭和四四年九月　九州大学文学部）に、（4）は注35引用書に転写され紹介されている。

＊32　ゴンザの諸資料がどのような過程を経て成立したものかという問題に関しては、村山七郎氏『漂流民の言語』・『新スラブ・日本語辞典　日本版』や田尻英三氏「18世紀前半の薩隅方言」（昭和五六年三月　『鹿大教育学部研究紀要　人文社会科学篇』三二巻）・「ゴンザの翻訳方法」（『奥村三雄教授退官記念　国語学論叢』平成元年六月　桜楓社）や迫野虔徳氏「方言と国語史」（平成二年度西日本国語国文学会講演発表レジュメ）などに論がある。おそらく、田尻英三氏や迫野虔徳氏がいわれるように、ゴンザが口頭でおこなった翻訳をボグダーノフがロシア文字で転写していったのであ

ろう。

＊33　「九州方言の方言文法雑考」（昭和五一年七月『研究紀要』第一八号　鹿児島短期大学）。

＊34　田尻英三氏「18世紀前半の薩隅方言」。

＊35　『新スラブ・日本語辞典　日本版』（昭和六〇年五月　村山七郎編　協力者井桁貞義　輿水則子　ナウカ書店）による。

＊36　注24引用の迫野虔徳氏論文。

＊37　江口泰生「形態音韻論的観点からみた一八世紀初頭の薩隅方言――動詞の音便形について――」（近刊）参照。

＊38　奥村三雄氏「所謂二段活用の一段化について――方言的事実から史的考察へ――」（注22引用論文）・外山映次氏『講座国語史　2　音韻史・文字史』二一八頁。

＊39　薩隅方言においては「――ヤイ」が下接すると語幹と融合して拗音化する傾向がある。この場合、語幹を長音化する事によって、語幹の語形を一定に保とうとしたものと思われる。

＊40　出雲朝子氏「文語ア・ハ・ワ行下二段活用に属する動詞のヤ行下二段化現象について」（『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』所収　昭和五七年一〇月　桜楓社）において指摘された事象もこれに類する現象といえる。なぜなら、活用の種類そのものには変更がなされてないからである。これに対して、―アウ型動詞の回帰、延いては助動詞「よう」の成立・「二段活用の一段化」現象は、活用を合理化する過程を辿った、まさに文法的意味を持った現象と考えるべきであって、両者は峻別されるべき現象なのではなかろうか。

＊41　注16引用の小松英雄氏論文。

＊42　注17引用の柳田征司氏論文。